

定家歌学と六条家説

『僻案抄』をめぐる

東野 泰子

一 はじめに

御子左家と六条家は院政期に対立的な関係にあった二大歌道家である。その対立関係は、歌合という表現の場における論争（例えば『六百番歌合』）において最もよく表れているけれども、こうした論争の根底にあったものが両家の歌学の対立であることは言うまでもないことである。御子左家と六条家の学問的態度がかなり違ったものであったことは、それぞれの家が書写・校訂した諸作品の本文から窺うことができる。定家以降現在に至るまで、平安時代文学を中心とする多くの作品は、定家系統の本文によって享受・研究するものが主流であったのだが、その定家系統の本文には、定家自身の立場から校訂が加えられている場合がある。これに対して、六条家の清輔や顕昭は、定家にくらべれば、祖本に忠実であろうとする書写態度をもっていたようである。^(注1)御子左家と六条家とは、学問的態度において異なる論理をもっており、この学問的な側面から両家の関係をとりとえる必要がある。

その場合、この両家の学問上の関係を、ただ対立するものとしてとらえがちであるが、同時代に活躍した両家の間に全く影響関係が

なかったわけではない。特に定家の歌学について考える場合には、六条家からの影響という視点が必要になる。まず、定家による古今集注釈『顕註密勘』は、顕昭の『古今秘註抄』に対して定家が自説を書き加えたものだという事実がある。『顕註密勘』について著された後撰・拾遺集注釈『三代集之間事』（以下「間事」と略称する）についても、川平ひとし氏によって、清輔の『奥義抄』を対置・批判の対象としていることが指摘されている。^(注2)さらに、『僻案抄』についても、川平氏がその諸本論のなかで、やはり六条家の説を対置・批判の対象としている例を示している。^(注3)また、深津睦夫氏は『僻案抄』古今集部分の注釈対象範囲が六条家のそれにほぼ含まれることを指摘し、六条家の注釈範囲が定家にとって「梓組」であったとされる。^(注4)つまり、定家にとって六条家説は主たる批判対象であったと考えられるのだが、逆に、この批判対象である六条家説から影響を受けてしまっている場合が『僻案抄』には見受けられるのである。すなわち、定家歌学の形成過程を考えるにあたっては、六条家からの影響関係をおさえることが必須であるといえる。本稿では、『僻案抄』において、六条家説を批判するのがどのような場合であり、どのよ

うな点で影響を受けていたかを明らかにしてゆくことを試み、定家歌学の形成過程の一端を窺うこととしたい。

二 批判対象としての清輔

『僻案抄』中に歌学者として名前がみえるのは清輔と顕昭だけである。それらは全て批判的文脈においてあらわれており、『僻案抄』の主たる批判対象はこの二人であったと考えて問題はない。ただ、ここでは、その批判のあり方について幾つかの点を確認しておきたい。そこで次に、『僻案抄』において清輔・顕昭の名がみえる五例の全てを示した。

①此鳥さまざまに清輔朝臣等の人く説、をかきて事きらざるべし。
(古今二〇八番歌注「いなおほせ鳥」)

②顕昭後撰のおきつたまもをかつく身にしてといふ歌を了見して海へたと申しける。ことはりかなひてさとりいだして侍けり。
(古今六六九番歌注「うみへたに」)

③清輔朝臣奥義乍書出此哥不釋。以往人皆うみ邊だにと存か。
(同右「うみへたに」一類本独自異文)

④件草子其時不知誰人所進。手跡も清輔朝臣年来委見知。即返上訖後経多年奥義集進二條院之時まくかたの釋所書加也(中略)以往年未勘後日注書。非傳授之説之由分明也者。(以下略)

(後撰九一六番歌注「まてかた」)
⑤此集作者おほつふね、清輔朝臣本にはおほつ少将、家本にはおほつふね也。
(後撰作者注「おほつふね」)

(引用は、宮内庁書陵部蔵鷹司家本による。)

右の諸例からまず言えることは、六条家の中でも、定家が批判の照準を当てていたのは主に清輔であるという点である。右の五例中②にのみ顕昭の名が見えるが、これは③の一類本独自異文に言うように、清輔「奥義抄」にこの歌が掲出されながら注文がないため、顕昭説を紹介したものと思われる。また、①に「人く説、をかきて」とあるように、「いなおほせ鳥」に関する記述は、『能因歌枕』『綺語抄』『俊頼髓脳』にみえ、顕昭「袖中抄」も取り上げているが、定家はこれを「清輔朝臣等の人く」と清輔で代表させている。さらに、④「まてかた」については、『六百番歌合』において取り上げられ、『顕昭陳状』には俊成判詞への反論が示されているにもかかわらず、定家は顕昭の反論にはふれずに、『奥義抄』成立に関する俊成の知見を伝えつつ、あくまで『奥義抄』を批判している。前節でふれた『間事』についての川平氏の指摘、

「奥義抄」の名を何ら示すことなく、「釈」云々が直ちに同抄の記載をさしている。^(注7)

を合わせ考えるなら、『僻案抄』においても、批判対象としてとらえられているのは、主として清輔であるといつてよからう。

次に、批判にあたつて、定家がどのような点を問題としているかについて考えてみたい。④では「往年はいまだ勘せず、後日注を書く、傳授にあらざる説の由、分明なる者」と述べ、『奥義抄』において後に加筆された注は伝授の説であるはずがない、と批判している。定家自身は俊成から「庭訓口伝」の説を伝授されていたところから、こうした批判が生まれたものであろう。『僻案抄』の識語には、

往年治承之比、古今後撰両集受庭訓之口伝、

とあり、注文中にも「……とぞいましめられし」「……とぞ申されし」といった記述や、「古今さづけられる時の物語の内なれば指事ならねど書付之」といった記述がみられる。つまり、ここでの清輔批判の論点は、清輔説が父祖から伝授されたものでないとして、基俊・俊成と受け継いできた御子左家説の優位を説く点にある。

また、六条家批判におけるもう一つの論点は和歌本文の異同にある。先の④では御子左家の本文が「まてかた」であって「蔦湯」と解釈するのに対し、清輔は「まくかた」の本文によって「蔦湯」と解釈する。これについて、定家は「此抄物（奥義抄をさす）之時忽時誤多後撰を見て書。僻事也。……大納言本又まて分明也」と述べ、清輔の使用した後撰集本文を「誤り多き」と批判している。加えて、⑤において、「家本」に対するものとして「清輔朝臣本」に言及していることにも注意すべきであろう。いうまでもなく、これらの説の違いは本文の異同に起因するのであり、後述するように、「僻案抄」における清輔批判は本文異同の問題と深く関わっている。

三 清輔本古今集本文への批判

『僻案抄』において、定家は、清輔を主たる批判対象としていると考えられる。前節で取り上げたのは名指して批判している場合であったが、はっきりと名指さぬものの、清輔の用いた和歌本文を批判していると思われる部分がある。

⑥ このまよりもりくる月の影みれば心づくしの秋はきにけり
此哥おぼつかなき事なし。例の本におちくる月とかきたるをめでたき説といふ物あり。をのがよむ哥もき、にく、しな、き

すがたことばをこのむ物は、ふるき哥をさへをのがうたのさまにつくりなす也。月落とは山にいる月也。おちくるとはいふべくもあらず。月にかぎらずおちくるといふ詞、このみよむべからず。

右の部分で定家は、自らのとる「もりくる月」という本文が正しく、「おちくる月」という「例の本」の本文は「をのがうたのさまにつくりな」した改変本文であると批判している。この「例の本」というのは何か具体的な本を念頭に置いた言い方であって、『僻案抄』のこれ以前の部分にある、次の叙述を受けるものと思われる。

（前略）これをいときかりとい文字かきたがへたる本につきて最と釋する説は不可用。物をかきうつすとて、あらぬ僻文字どもかきたる物のことやうの手なる草子を貫之自筆といひて、人すかしける物をもてなしていひたてたるいたづら事也。その本貫之が手にあらず。

（『僻案抄』古今七七番歌注）
「例の本」とはこの「貫之自筆」と称する本を指しているらしい。

右の部分で述べられているのは、ある人が「貫之自筆」と称する本によって「最と釋する説」をとっているが、その「貫之自筆」本は偽書である、ということであり、定家は、「かきたがへたる」「僻文字ども」「人すかしける」「いたづら事」と手厳しく批判している。ここで批判されている「最と釋する説」は、次に示す『顯註密勘』の顯註部分に見られるものである。

いとさかりとは、いとは最也。さかりは盛也。普通にはひとさかりとある、而証本にいとさかりと侍れば、其本につくべし。

（『顯註密勘』・引用は『日本古典文学影印叢刊22』所収中央大

学図書館本による。

顯昭の「両証本」とは『顯註密勘』の他の部分にみえる「通宗朝臣が証本」と「崇徳院御証本」を指す。それゆえ、『僻案抄』が批判対象とする「貫之自筆本」例の本は、この顯昭所持本を指すかとも思われる。しかし、同じ『顯註密勘』の識語に、「貫之自筆本」への言及がみられ、定家が「貫之自筆本」を、「崇徳院本」の流れをくむ清輔の『注古今』と結びつけて認識していたことが知られる。

抑崇徳院に貫之自筆本と申す古今侍りけり。教長卿、五條三品禪門亡父、清輔朝臣をのく申うけてかきうつしけるを（…中略…）近來或人清輔朝臣の「注古今」と申草子をみせ侍し、注の外の事はことにははらさりけりと云侍しに、のちに又かの秘本と申物みする人侍し、かれこれ不同、いかに侍りし事にか、いづれか書誤りけん、おぼつかなくぞ侍し、。件草子奥書

「平治比見合了新院御本（…中略…）」

後人手跡

是清輔朝臣自筆所書写本也 件本二條院召取以来 御自筆勘付異説 御返給清輔者也 其後得件本書写之云々

是即此注御本注本也 不入此注哥之中

木のまよりおちたる月の影みれば心づくしの秋は来にけり
凡如此之詞 不可勝計

承久三年三月廿八日雨中注付之

八座沈老 在判

『顯註密勘』識語

この定家識語では清輔朝臣の『注古今』への不審が述べられ、さらに『注古今』の奥書が転写されている。『注古今』の清輔自身の識

語は「平治比…」以下の部分で、その後「後人手跡」の奥書が「…其後件本書写之云々」まで続き、以下は定家自身による記述に戻ると思われる。ここで注目すべきは、定家が問題の「このまより」歌を典型例として、「およそかくのごときの詞、勝計すべからず」という『注古今』への批判を加えている点である。この『顯註密勘』識語から考えるならば、定家のいう「貫之自筆本」は、崇徳院本の清輔による転写本を指すと思われる。『僻案抄』の⑥「このまより」歌注の執筆に際して、定家の念頭にあったのは、顯昭の両証本というより、定家が実際に披見し得た清輔の『注古今』であったと考えるのが自然であろう。前節の⑤の例においても「清輔朝臣本」を挙げており、定家が清輔の本文を自家の本文に対立するものとして意識していたことが窺える。

問題の「このまより」歌の異同は第二句にあり、『僻案抄』掲出歌は「もりくる月の」、「僻案抄」注部分で批判対象となっているのが「おちくる月の」、「顯註密勘」引用の「清輔朝臣の注古今」の本文が「おちたる月の」である。同歌の異同を『古今集校本』によってみると、「おちたる月の」とするのが雅経筆崇徳院本・永治二年清輔本・保元二年清輔本・伏見宮顯昭本・天理図書館顯昭本である。また「おちくる月の」とするのは六条家本である。定家が批判した「おちたる月の」「おちくる月の」という本文は、現在の六条家系統の諸本に確認することができる。

このようにみてくると、『僻案抄』の「このまより」歌注における「をのがよむ歌もき、にく、しな、きすがたことばをこのむ物は、ふるき哥をさへ、をのがうたのさまにつくりなす也」という批判は、

清輔の書写校勘態度と実作に向けられたものと考えられるのではないだろうか。『僻案抄』のこの記述について、深津睦夫氏は、家隆が「おちくる」という表現を再三用いていることから、家隆の実作に対する批判であるとされる。^(注9)しかし、本文校訂の態度と関わっての批判であるから、批判の対象に清輔が含まれる可能性を検討してみなくてはならない。

この「おちたる月の影」歌をめぐる、清輔の実作と清輔本古今集本文の関係については、稲田利徳氏による考察がある。^(注10)稲田氏は六条家系統の「このまよりおちたる月の」という本文による古今集歌を本歌として、清輔が次のような歌を詠んでいることを指摘しておられる。

森間寒月

冬かれの森の朽葉の霜のうへにおちたる月の影のさむけさ

(書陵部本清輔朝臣集・二二八)

つまり、『僻案抄』の本文と実作の両方に関わる批判は、清輔に最もよくあてはまるといえる。ただし、右の清輔歌は『新古今和歌集』冬部に入集しており、定家と雅経の撰者名注記が付されている。また、定家は『近代秀歌』『詠歌大概』の秀歌例にこの清輔歌を挙げていることもあって、『僻案抄』の記述を対清輔批判とすることに問題は残る。けれども、この清輔歌が定家の脳裏にあったからこそ、『顕註密勘』識語末尾において、特にこの「このまより」の歌を例としてあげ、『僻案抄』で「をのがよむ歌もききにいく」という実作にかかわる批判を加えたと見ておきたい。

定家は、『僻案抄』に先立つ『近代秀歌』『詠歌大概』の段階では、清

輔歌が清輔本古今集による表現であることに気づいていなかったのかもしれない。また、定家の歌学は承久三年以降の晩年に大成されていったのだから、その過程で定家自身の和歌観が変化していったとも考えられる。定家における歌論と歌学は必ずしも連動するとは限らず、一元的にとらえられないと考えておくべきだろう。

四 『奥義抄』に依存した記述

『間事』についての川平氏の指摘のうち、引用に際して「『奥義抄』の名を何ら示すこと」がないという指摘は非常に重要である。『間事』では、書名を示さないものの、「釈云」或いは「注之」といった表現によって引用であることを明示しつつ『奥義抄』を引いている。『僻案抄』においても、『奥義抄』の名を示すことなく同抄の説にかかわる発言がなされているけれども、引用を行なっているわけではないので、叙述のあり方としては、より問題がある。次の⑥に示す『僻案抄』部分が『奥義抄』と関わりをもつことは、川平氏も既に指摘されているが、定家の叙述態度と本文の問題について、私見を加えておきたい。

⑥ おもひきや君が衣をぬぎかへてきき紫の色をきむとは

こき紫とは三位袍をいふ也(…中略…)

庶明卿参議正四位下左大弁。天曆五年二月任権中納言叙従三位于時 九條殿右大臣右近大将袍をつかはしける哥也。今世に四位袍ひとへに公卿におなじくできる也。資房卿記などにも三位して袍きあらたむとみえたり。

いにしへも契てけりな打はふきとびたちぬべしあまの羽衣

飛たちぬべしとは任納言悦喜自愛のよし也

除名推量不足言事也

〔『僻案抄』後撰集一一一、一一二番歌注〕

初着五位袍人用五藏人袍（…中略…）、こき紫三位袍名也。

不図可着此袍由歌は今日慶之饗応之詞也。不可有除名之疑。

〔『間事』同歌注・引用は『永青文庫叢刊9』による〕

『僻案抄』は、この後撰集の贈答歌を、庶明が中納言に昇進した際に三位用の「こき紫」の袍に改めた時の歌と釈している。ところが、注の末尾の傍線部分はそれまでの記述と関連を持っておらず、非常に意味がとりにくい。同様のことは、『僻案抄』に先立つ『間事』の傍線部分についてもあてはまる。いずれも「除名推量」「除名之疑」という説を批判しているようだが、その説の内容や、誰の説であるかは明示されていない。この「除名」説は『奥義抄』に次のようにみえる。

おもひきや君がころもをぬぎしときわがむらさきのいろをき
んとは

返し

いにしへもちぎりてけりなうちはふきとびたちぬべしあまの
はごろも

これは庶明朝臣中納言になれるとき、うへのきぬやるとて九條殿のよみたまへる哥なり。もし除名の人にてありけるが、中納言になれるにや。官位をとくには位にしたがひてきたるころもをぬがすることなれば、除名のときにはむらさき、るべしともおもはざりしにとよみたまへるにや。

〔『奥義抄』同歌注・引用は慶安版本による。〕

『間事』『僻案抄』の傍線部分の叙述は、右の「除名」説を知らなければ理解しづらい。この場合、当時の歌界では「除名」説が通説であったために、特に明示する必要を感じなかったとも考えられるが、『僻案抄』における名指しの批判が清輔に集中していることや、後述する⑦⑧などの例を考え合わせれば、定家が批判対象としているのは清輔『奥義抄』であると考えるのが妥当であろう。『僻案抄』傍線部分は批判であるにせよ、やや自立性を欠いた表現であって、『僻案抄』享受者が『奥義抄』説を知っているか、もしくは『奥義抄』を所持していなければ理解しづらいものである。批判でありながら『奥義抄』の影響力が表れており、『奥義抄』は『僻案抄』説の基盤の一つであったといえよう。

また、本文の問題について付言しておく、『僻案抄』と『奥義抄』では被注歌の本文に異同がある。四位であった人が「三位して袍きあらたむ」とする『僻案抄』説は「ぬぎかへて」という本文に対応している。一方、『奥義抄』の「ぬぎしとき」という本文であれば、かつて除名により衣をぬいだ、という解釈が成り立ち得る。両者の説の違いは本文の違いと連動するものであり、定家説は清輔の本文も否定することになる。『僻案抄』において清輔批判が行なわれている被注歌には、和歌本文に異同があるものが目立っており、院政期の歌学というものが本文校訂の問題と不可分であったことをよく示している。

⑥と同様の例をもう一例示すこととする。

⑦ みこしをかいくその世々に年をへてけふのみゆきをまちてみ

つらん

北野にみこしをかといふをかなり。延喜十七年閏十月十七日行幸北野、枇杷大臣于時中納言春宮大夫左兵衛督。又字誤に、みこしをかにてをみこしをかきてとかきたるに不審をなすは、そのこと、なき事也。(…中略…) 延喜にきたのにも大原野にも行幸ある也 枇杷大臣昇御興之由不知物由若亡之儀也

『僻案抄』後撰一一三二番歌注

此事の詞に、延喜御時北野の行幸にみこしをかきて、とあり。哥にはみこしをかとあれば、ところの名也。北野のかたにあるにや。或人云、近衛をばみこしおさと云也。枇杷大臣近衛つかさのときよみたまへる哥なり、みこしをさとよむべしともまふすめり(以下略)

『奥義抄』同歌注

『僻案抄』では「字誤に」以下が誰の説であるのかを明示していないけれども、『奥義抄』の傍線部分によると考えてよからう。ここで注意すべきは、やはり「字誤に」として本文異同が問題にされている点である。詞書本文が、『奥義抄』の「みこしをかきて」、及び同抄が「或人云」として紹介している「みこしおさ」であれば、「御興」をかついで詠んだという解釈が成り立ち得る。また「枇杷大臣御興之由不知物由有若亡之儀也」という末尾書入は、やはり、誰のどういう説に対する批判であるのか、わかりにくい表現になっているが、「字誤」の本文から生まれる解釈を批判したものとみておきたい。

ここで問題になっている後撰集一一三二番歌の詞書を、現存の後撰集諸本によってみると、定家本系統は「みこしをかにて」、六条家系統の鳥取県立図書館本・片桐洋一先生御所蔵傳坊門局筆本、及び

古本系統の堀河本、承保三年本系統の天理図書館本・伝日野光慶筆本が「みこしをかきて」となっていて、『僻案抄』説と『奥義抄』説をそれぞれ反映している。ただし、同じ六条家の顯昭「袖中抄」では、

今案二 後撰詞ハミコシヲカニテトアルベキヲ ミコシヲカキテトカキナシタルナリ ニノ字ヲキトカケルナリ……

(引用は「袖中抄の校本と研究」による)

として、はっきりと六条家系統の本文の誤りを認めている。このことから、『僻案抄』が「字誤に」と批判しているのが『奥義抄』であることが認められよう。

まとめると、『僻案抄』は、『奥義抄』説をそれと名指すことなく批判する場合がある。そしてその場合、『僻案抄』の叙述は『奥義抄』説を知ることなしには理解しにくいものとなっていて、批判でありながら『奥義抄』の影響下にあるといえる。また、定家は本文の異同を問題点としてとらえており、『奥義抄』の用いた本文を誤りであるとして否定している。

五 『奥義抄』説の継承

前節で述べたように、『僻案抄』は『奥義抄』を批判しつつも、相当意識していたようである。六条家の説、とくに『奥義抄』は、『和歌色葉』『八雲御抄』以下の歌学書に引かれており、また顯昭の言葉であるから多少割り引かねばならないが、「世の人々、奥義抄を枕草子にせぬはなし」(『顯註密勘』)というほど影響力をもっていたらしい。さらに、『僻案抄』における『奥義抄』の影響についてみる

と、これほど批判している「奥義抄」説を、批判的にではなく、そのまま自説として取り入れたと思われる場合がある。

⑧ けふよりはあまの河原はあせな、んそよみともなくたゞわた
りなむ

家本には、そころともなくといふ説をもちゐき。そよみとは、それは、水ともなくわたらむといふ心といふ。但行成大納言筆にそよみとか、れたれば、その説につくべし。

〔「僻案抄」後撰二四一番歌注〕

右の例⑧においても、根本的な問題点は和歌本文の異同にある。「僻案抄」が述べているのは、御子左家の伝来の本は「そころ」であつたが、後に披見した行成大納言自筆本に「そよみ」とあるのによつて改めたという、本文校訂の問題である。であるとすれば、定家が俊成から受け継いでいたのは「そころ」という本文及びその解釈であるはずであり、注文の「そよみとは、それは、水ともなくわたらむといふ心」という語釈は俊成から伝えられた説ではなく、他から得たか、もしくは定家が案出したものと考えられる。この間の事情は、「僻案抄」に先行する「間事」の次の記述によつて明白になる。

けふよりはあまの河原はあせな、むそころともなくたゞわた
りなむ

そよみと書て釋之

此説、そころもしらずといふ心也。底ともなくたゞ可渡由也。

〔「三代集之間事」同歌注〕

定家が行成自筆本を披見してみずからの本に校合したのは、天福

二年四月六日（天福本勅物）であるから、「間事」の段階（貞応二年）では和歌本文はいまだ「そころ」であり、「そころ」の語釈を示している。ただし「そよみと書て釋之」という部分は「奥義抄」説を注記したものと考えられ、したがつて、「僻案抄」において取り入れられた「そよみ」の語釈は、次の「奥義抄」説であるとはば考えてよからう。

そよみともなくとは、それは、水ぞとわくこともなくたゞちに
わたらむとよめる也。あせな、んとはある、事也。
（注）

さらに定家の天福本後撰集の書入には次のようにある。

けふよりはあまの河原はあせな、んそよみともなくたゞわた
りなむ
（そよみとは、水ともなくわたらむといふ心とす。本用之）

「家本用そころ」と注記しているように、天福本文は「そころ」のままになっているが、行成自筆本を校合した未書入には、「そよみ清本奥義釋之 本用之」とある。このことから、「僻案抄」において、定家はみずからの判断によつて行成自筆本の「そよみ」という本文に校訂し、「奥義抄」からその語釈を取り入れたことが明らかになる。

つまり、定家は俊成から伝えられた家本及び説を無批判に墨守している訳ではなく、自らの判断によつて本文校訂を行なったのである。そしてそれに伴つて、「奥義抄」説を清輔説と断ることもなく取り入れ、自説としたものであろう。

同様に、「僻案抄」が「奥義抄」説をそれと断らずに取り入れている場合をもう一例示す。

⑨ 山もりはいはいはなむ高砂のおのへのきくらおりでかど、

む

高砂はりまの名所なれど、すべて山をばたかきごとといふ。ひとつの説也。此哥ひえの山にてよめるといふ。おのへとはおのうへといふ也。

〔僻案抄〕後撰五十番歌注

ここにみえる「ひとつの説」という言い方は、「一説」という言い方とともに『僻案抄』中に散見され、御子左家の説ではないものを引用する場合に用いられているようである。この「山もりは」歌の注は『俊頼髓脳』にも『奥義抄』にもみえ、『僻案抄』の「ひとつの説」はいずれかを参照したものと思われる。

山もりはいはいはなむ高砂の尾上の桜をりてかざむ

これは、ことばの如くならば、素性法師が、花の山といふ所にて花を折りて、詠める歌なり。高砂の尾上といふ所は播磨の国にある所なり。花の山は、この山城の国にある所なり。：（中略）：この素性が歌は、おほかたの山の名をたかきごとといふ事のあれば、をのへといへるは、山に尾といへる所あれば、その尾の上にといへるなり。かれもこれも咎なし。

〔俊頼髓脳〕・引用は日本古典文学全集『歌論集』による

山もりはいはいはなむ高砂の尾上の桜をりてかざむ

これは播磨國の高砂にはあらず。山の一名をはたかきごと云也。おのへとは山の尾上と云也。比叡山にてよめる歌也。又山をあしひきといふ。（以下略）

〔奥義抄〕同歌注

『俊頼髓脳』『奥義抄』ともに、「高砂」を地名ではなく山の一名としており、『僻案抄』の引く「ひとつの説」と一致する。ただし、こ

の歌がどこで詠まれたのかという点について、『俊頼髓脳』が「花の山」とするのに対し、『奥義抄』と『僻案抄』はいずれも「比叡山」としており、このことから、『僻案抄』は『奥義抄』に依っている可能性が高いといえる。

ところが、ここでも詞書本文の異同が問題になる。この歌の詞書を定家本系統の後撰集諸本においてみると、「花山にて」となっている。定家本本文に依るならば、『俊頼髓脳』と同じく、「花の山」で詠まれた歌と解釈するべきであって、「比叡山」ではない。一方、清輔本系統の後撰集では、鳥取県立図書館蔵承安三年本や片桐洋一先生御所蔵伝坊門局筆本は「花山にて」となっているものの、片仮名本では「山ニテ」、二荒山本も「山にて」とする。『奥義抄』の「比叡山」説は、片仮名本や二荒山本の本文に対応している。逆に、『僻案抄』の「ひえの山にてよめるといふ」という解釈は、定家本の後撰集本文から出てくるものではない。「山をばたかきごとといふ。ひとつの説なり」という部分を『奥義抄』から参照し、続けて、自らの後撰集本文とは齟齬をきたす「比叡山」説を取り入れてしまったものである。そしてこの場合にも、とくにそれを清輔の説であると示すことなく摂取して、自らの説としている。

『僻案抄』を一見する限りにおいては、清輔の名は批判的文脈においてのみ表れており、また、主たる批判対象であることも確かであるが、一方で、この⑧⑨例のように、清輔説を取り入れたらしい形跡も見受けられる。批判の場合とは異なり、摂取する場合には清輔の名を示すことはしていないが、批判するにせよ、継承するにせよ、『僻案抄』は『奥義抄』から大きな影響を受けているといつてよ

いであらう。

六 定家歌学の形成過程—家説と『奥義抄』説

『僻案抄』は、その識語に「古今後撰両集、庭訓口伝を受く」とあるように、基俊・俊成と伝えられた家の説をまとめることを一つの目的としていたらしい。ここで注意すべきは、定家が「庭訓口伝」と述べている点であって、伝えられていた家説はまとまった注釈書の形にはなっておらず、口伝あるいは古今後撰本文への行間注といった形であつたらしいことが窺える。この口伝や行間注を定家なりにまとめたものが『僻案抄』であるのだが、『僻案抄』における定家歌学の形成過程において、六条家の、とくに『奥義抄』の影響が認められることは、ここまでに述べてきたとおりである。定家は家説と六条家説との間で自らの説をつくりあげていったのであり、家説を墨守し六条家説を批判するというような一元的な態度ではなかったようである。

⑩ 人名 寵

おほくうつくといひけりとかきたる説、きこゆれど、金吾はた寵とよまれければ、其説をうけたり。さるは、堀河右大臣うつくとよまれけりとかきたる物あめれど、金吾まさしくちようと申されけり。

（『僻案抄』古今作者名注）

右の⑩の例で定家は、基俊（金吾）、俊成と伝えられてきた説が「寵—ちよう」であることを主張している。ただし、ここでは御子左家伝来の説を示すだけではなく、「堀河右大臣うつくとよまれけりとかきたる物」の存在を示してもいる。『僻案抄』に先行する現存歌

学書のうちで、「堀河右大臣（道長男頼宗）」説は『奥義抄』にしか見えず、「かきたる物」は『奥義抄』を指すと思われる。

寵 女の名也。或人云これはうつくとよむ也。かの人かたちのためでたくて君のおぼえにてはべりければ、うつくとはいかがかくべきと議しけるに、おぼえなるによりて寵とかきてうつくとはよむ也と、いまたくみいだしたる事也とぞ、ほりかわの右のおほひとはかたり給しと、大宮のおほいとこののあかし給ふとて、故一條殿のおほせられける也。（後略）

（『奥義抄』）

この『奥義抄』の「うつく」説についてみると、「うつく」という女性名が先に存在し、寵愛された女性であることから、後に「寵」の字をあてたとしており、説の根拠を示している。これに對して、『僻案抄』の「ちよう」説は基俊から伝えられたという由緒を主張するのみで、説の根拠は示しておらず、「うつく」説への批判も加えていない。定家としては御子左家伝来の「ちよう」説だけを示しておけばよかったはずであるが、批判することもなく他説として『奥義抄』の「うつく」説を示している。『奥義抄』が当時の歌学の世界にとって、ひいては定家にとって、無視し得ない影響力をもっていたことのあらわれであろう。

また、次に示すのは、定家が庭訓の家説、『奥義抄』説を参照しつつ、自らの説をつくりあげた過程が窺える例である。

⑪ こよろぎのいそたちならしいそなつむめざしぬらすなおきにをれ浪

めざし、一説、あまのいさりすとて物とりいる、寵のやうなる

物也。一説、海草など、るめのわらべ也。めをさしきりてとればめざしといふ。

竹河哥に、竹河のはしのつめなるや、はしのつめなるや、はなぞのに我をば、なてや、我をばはなてや、めざしたぐへてめのわらはべといふも、さもありぬべくや。

〔僻案抄〕古今一〇九四番歌注

この古今集歌は『能因歌枕』や『和歌童蒙抄』にも引かれているけれども、それらは『僻案抄』の内容とは関わりをもっていない。ここで示される二つの「めざし」説のうち、「籠」とする一説は『奥義抄』に依り、「めのわらはべ」とする一説は『顕註密勘』の顕昭説に依るものである。

めざしとは海士のいさりすとて物とりいる、こ也。竹にてくめり。(後略)

〔奥義抄〕同歌注

いそなつむめざしとは、いそなは、みるめ、なのりそなど云海藻也。めざしはめのわらはべなり。かたなをもちていそのめをさしきりてとれば、めざしと申すとぞ、よくみたる物は申し侍し(中略)：

めざし庭訓如奥義集。あまのいさりすとてものとりいる、籠也とぞ申き。今、童部と侍る釋、さだめて証侍らん歟、彼籠と云説も古賢と申せども、たゞをしはかりにも申あはれけんかやうの事は国の風俗土民の説をさきとして可用事也。催馬楽、竹河のはしのつめなるや、はしのつめなるや、はなぞのに、我をばはなてや、我をばはなてや、めざしたぐへて

〔顕註密勘〕同歌注

右の『顕註密勘』密勘部分に「庭訓如奥義集」とあることから、定家が『顕註密勘』執筆にあたって、『奥義抄』も参照していたことが知られる。この例⑪の場合には、庭訓も『奥義抄』も等しく「籠」説であるにもかかわらず、定家はこれを鶴呑みにはせず、『密勘』の段階では顕昭の「童」説に傾きつつあった。そして、「証侍らん歟」と、この「童」説の論拠を求め、『密勘』末尾に催馬楽「竹河」歌を書き加えたものらしい。この「竹河」歌は定家の「奥入」初音巻にも引かれており、定家自身が和歌や源氏物語の注釈を進める過程で発見した「証」であろう。

ここで定家は、庭訓の家説、及び『奥義抄』説を前提としつつも、自ら「証」を発見することによって、顕昭説を認めるに至っている。最終的に『僻案抄』では、庭訓及び『奥義抄』の説である「籠」説と、顕昭の「童」説とを並記し、『竹河』を「証」として示している。定家は、俊成から伝えられた家説と『奥義抄』説を前提としながらも、それを墨守することを目的とせず、自らその説の内容を検討し、顕昭説を取り入れることもあったのである。

この⑩、⑪の二例において、定家は俊成から伝えられた庭訓の家説を示す一方で、他説として『奥義抄』説や顕昭説をも並記している。このように、『僻案抄』はそれと示すことなく六条家説を撰取する場合があり、御子左家説だけではなく、六条家説をも継承しているといえる。であるとすれば、次のごとき例も、六条家説を撰取したものである可能性があらう。

⑫ なにはがたかりつむあしのあしつ、のひとへもきみに我やへだつる

あしつ、はあしのよのなかにうすやうのやうなる物也。それほどもへだてずといふよし也。『僻案抄』後撰六二六番歌注

葦つ、とはあしのよのなかにうすやうのやうにてあるかは也^(注13)

よくうすきもの也。さればあしつ、ばかりのへだてもわが心にはなしとよめるなり

『奥義抄』同歌注

- ⑬ ひきまゆのかくふたこもりせまほしみくはこきたれてなくをみせばや

ふたこもりはおなじまゆにかひこのふたつこもりたるをいふ。桑をこくによそへてこきたれてなくとよめる也

『僻案抄』後撰八七五番歌注

ふたこもりとはおなじまゆにかひこのふたつこもれるをいふ也。くは、こくものなれば、こきたれてなくにそへたる也。

『奥義抄』同歌注

右に示した例⑫⑬は、『僻案抄』と『奥義抄』とが同説であり、とくに傍線部分はそれぞれ同文といってもよいほど類似した表現になっている。もちろん、この⑫⑬では、「一説」等と他家説であること示す記述はなく、たまたま、定家が受け継いでいた家説と『奥義抄』説が同じであった可能性もある。しかし、その場合も、『奥義抄』とほぼ同文といってもよい記述となっていることから、口伝や行間注の形で伝わっていた家説以上に、すでに文章化されていた『奥義抄』が影響したと考えるもよからう。

以上のように、『僻案抄』には、六条家説であることを断ることもなく、それを取り入れたらしく思われる例が存在する。『僻案抄』において、六条家とくに清輔の説は批判的文脈において現われている

ようにみえるが、一つ一つの注文を子細に検討すると、六条家説と示さずにそれらを引用したと思われる例が少なからず見受けられるのである。つまり、定家は、自らの歌学の基盤に御子左家の説、及び六条家の説がある、という柔軟な態度を示しているのである。

七 むすび

『僻案抄』の主たる批判対象が六条家、とくに清輔であったことは、彼を名指して批判しているところから、明らかである。しかし『僻案抄』の叙述を子細に検討すると、批判対象であるはずの清輔説から少なからぬ影響を受けていることが判明する。『僻案抄』には、それと示さないものの、明らかに『奥義抄』説を意識した批判的叙述が見られる。そして、そうした批判的叙述のうちには、『奥義抄』説を知ることなしには理解しにくいものもあって、その意味で『奥義抄』への依存をも示している。また六条家説を他説の一つとして引用したり、さらにはそれと示すことなく摂取していると思われる場合さえ見受けられる。このように、定家は六条家説に対して、表面上は批判的態度に終始しているように見えるけれども、実際には、御子左家説をひたすら墨守し六条家説を批判する、というわけではなく、柔軟な態度をもって、定家自身の歌学説の形成を目指していたようである。

また、この定家歌学の形成過程を考えるにあたり、重要なことは、彼の歌学説は本文校訂の問題と直接結びついているという点である。いうまでもなく、『顯註密勘』『三代集之間事』『僻案抄』という定家歌学の過程は、定家の三代集校訂作業と無関係には考えられない。定

家が六条家説を批判する場合の論点に、本文異同に起因するものが多いのも当然であろう。しかしながら、定家自身が家本の本文を校訂した「そよみ」、あるいは定家本の本文からは生まれ得ない「ひえの山」説において、『奥義抄』説の影響が見られることは重要である。定家は彼自身の判断によって本文に校訂を加えていたと考えられるが、その定家の校訂態度の詳細を探る上でも、六条家説とのかかわりにおいて定家歌学をよむということが必要になる。

定家は古典作品を尊重し、その書写保存に努めたけれども、本文への校訂は定家自身の見解によって加えられたものであった。定家の時代、院政期は、古典作品に対する学問的なものが意識された段階であって、御子左家なり六条家なりの人々が、自身の学問の形成に努めていた。伝授の説の墨守に努めた後の時代と異なり、さまざまな学問的姿勢があり得たのであって、その意味では、ある種の自由さをもっており、一元的には理解できないといえる。一見対立的関係にあった御子左家と六条家は、対立しつつも相互に影響しあっていたのであり、両家の学問の形成過程と相互の影響関係を探ることとで、そうした院政期の学問のありようにかかわってゆくことができるのではないかと考える。

注

- (1) 北村知子氏「俊頼から顕昭・定家へ——俊頼髓脳をめぐって——」『國語國文』第五十巻第七号・昭和五十六年七月。鳥井千佳子氏「清輔本古今集の性格」『和歌文學研究』第四十九号・昭和五十九年四月。等。

- (2) 川平ひとし氏「『三代集之間事』読解」『跡見学園女子大学国

文学科報』11・昭和五十八年三月。

- (3) 川平ひとし氏「僻案抄書誌稿一、二、三」『跡見学園女子大学紀要』第十六、十七、十八号・昭和五十八、五十九、六十年。

- (4) 深津睦夫氏「僻案抄について——注釈過程における定家の意識をめぐって——」『皇學館論叢』第二十四巻第四号・平成三年八月。

- (5) 川平氏は(注3)論文において、久曾神昇氏によって初稿本・再稿本と分類されていた『僻案抄』の諸本を、一類本・二類本・三類本と新たに分類し、原態は二類本に近いのではないかとされた。稿者は、定家が天福二年に披見したと思われる行成自筆本後撰集に関する記述が一類本(従来の初稿本。嘉祿二年の識語のみを持つ)にもみられることや、本稿ではふれることができなかったが、一類本・二類本間の異同の検討等から、川平氏の見解に賛同し、本稿における『僻案抄』の引用は、二類本中の最善本と思しい宮内庁書陵部蔵鷹司家本を用いることとし、句読点濁点を私に付した。例②の一類本独自異文に関しては、高松宮家蔵有栖川家旧蔵本の紙焼写真版(国文学研究資料館)を参照した。

- (6) 『六百番歌合』「寄海人恋」題、顕昭詠についての、俊成判詞及び「顕昭陳状」。

- (7) 川平氏(注2)論文参照。

- (8) 「例の本」が貫之自筆と伝えられた古今集証本を指すことについては、鳥井氏も(注1)論文で論じておられる。

- (9) 深津氏(注4)論文参照。

(10) 稲田利徳氏「『落ちたる月の影』考―清輔本『古今集』の享受―」(稲賀敬二編『源氏物語の内と外』所収、昭和六十二年十一月)。

(11) 川平氏(注3) 論文参照。

(12) この傍線部分は『僻案抄』と『奥義抄』とで微妙に異なっており、一致していないが、この部分は『奥義抄』諸本間で異同があり、一致しないのは『奥義抄』本文の側の問題であるかも知れない。『奥義抄』の歌学大系本・豊橋市立図書館本・書陵部完本は慶安版本と同じ「水そともわくこともなく」、書陵部の中巻のみの残闕本は「水そともわく事もなく」、内閣文庫完本は「水そともなくこともなく」となっている。

(13) この傍線部分も『僻案抄』が「物也」、『奥義抄』が「かは也」と異なっている。『奥義抄』のこの部分は『袖中抄』にも引用されているが、その『奥義抄』所引部分を『袖中抄』諸本においてみると、歌学大系本と板本では「物也」となっている。また、『色葉和難集』所引の『奥義抄』のこの部分も「物也」とする。ただし、定家筆の『奥義抄下巻餘』(天理図書館善本叢書『平安時代歌論集』所収)が伝存していることから推察されるように、定家は『奥義抄』を直接参照していたと思われる『袖中抄』経由で引用したとは考えにくい。